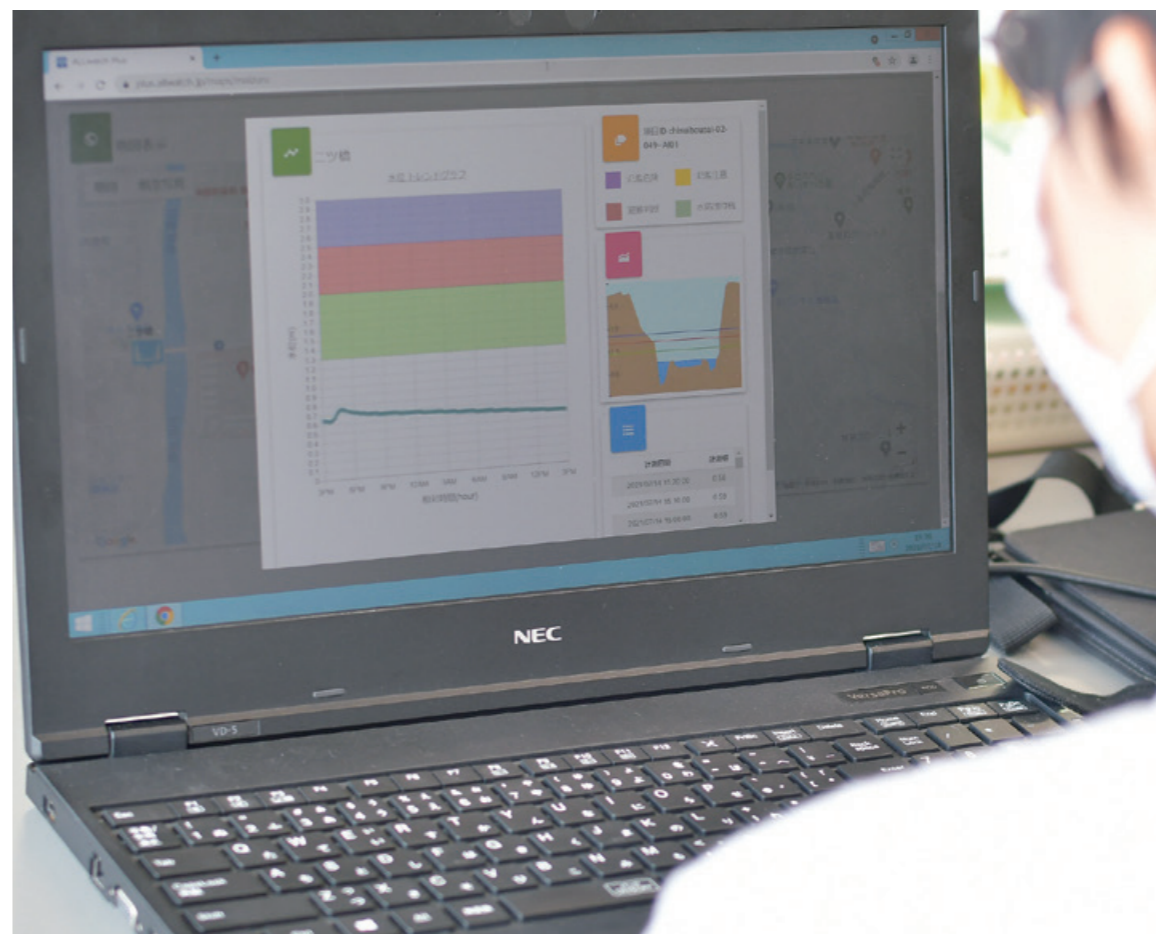


未来技術等を活用した心が通う持続可能なまちづくり  
総合モニタリング情報配信システムで  
より安全・安心のまちづくり



右上) 水位情報を測定するモニタリング水位計  
右下) 緊急時はスマホでも  
左上) 平成29年の浸水被害の様子(真名井商店街)  
左下) システム今後のイメージ

**施策に関するご意見を**  
このページに関する意見や感想をお寄せください。  
皆さんと一緒にまちづくりを進めていきます。  
▶詳しくは、危機管理・防災課 (☎66・1089) へ。



▲水位計から得たデータを閲覧できる舞鶴市総合モニタリング情報配信システム

舞鶴高専の建設システム工学科教授で  
防災士の加登さんにお話を聞きました。

防災は、個人の動き、自助ということが重要になってきます。自助のためには情報がないと自分で行動ができないので、正しくて精度の高い情報をいかに得られるか、情報を得た時に自分がしっかりと動けるかということが命を守ることに繋がります。今回運用を開始したシステムは、この情報を正確にいち早く届けるためのものなので、これからは正しい行動ができるための防災教育が必要になってくると思います。

また、災害は特別なものという考え方ではなく、普段の生活の一部くらいに認識してもらえたら防災力が高まります。このため、こうしたシステムも日常的に使われることが大事です。天気予報など毎日見るものをこのシステムに取り込んでしまうのもひとつの手段ではないでしょうか。さらには既存のハザードマップと重ね合わせるとより危機意識の向上につながると思います。

今回のシステム運用開始をきっかけに  
さまざまな検討が重ねられ、さらに防災力が向上することを期待します。

舞鶴工業高等専門学校  
加登 文学 さん



に対応し、適切なタイミングとエリアでの避難行動ができるように、第1ステップとして水位情報の提供を開始しましたが、これからさらに、国や京都府の防災情報を受け取り、このシステムと連動させることで、自治会ごとに、6時間先を見据えた避難情報の発信を目指しています。今後、令和4年度末まで、実証実験やシステムの検証を行い改良を進め、令和5年度の本格運用を目標としています。

**◆普段から使ってもいいシステム**  
また、システムは使われなければ意味がありません。今後は、新型コロナウイルスの感染リスク回避のための二酸化炭素濃度や潮位、積雪、雨量など、生活に身近な情報も追加し、普段から使われるシステムを目指すことで防災意識を向上させ、安全・安心のまちづくりを進めていきます。

**◆大雨リスクの増加と防災**  
日本中で相次ぐ豪雨災害。本市も過去5年の間に3度も台風などによる浸水被害が発生しています。地球温暖化の影響とも考えられていますが、近年、短時間に強い雨が降ることが増加傾向にあるなど、大雨リスクが増加しています。  
こうした中、国では豪雨災害から命を守るため、防災気象情報の伝え方の改善に向けた取り組みが進められています。本市でもハザードマップの作成をはじめとした防災の取り組みに加え、昨年度からは国の戦略的イノベーション創造プログラム(S-IP)が開発を進めている「市町村災害対応統合システム」のモデル自治体(全国で7自治体)として、関係機関と連携した実証実験を行っています。

**◆避難情報として活用**  
本市の浸水被害の特徴は、山と海が近いことで水位上昇が早く、高潮の影響が非常に大きいことがあります。この特徴は、オムロンソーシアルソリューションズ(株)やKDDI(株)などの民間企業や舞鶴高専と連携し、河川の水位情報がパソコンやスマホで一目で分かるようになりました。  
大雨や台風が接近した時の河川の水位情報をリアルタイムで確認でき、利用者の現在地を中心に情報を表示できます。また、危険度を分かりやすく伝えるために、河川の水位情報を色分けして表示しています。  
水位情報は、国や京都府がすでにオープンデータ※2として配信している河川水位情報を活用するとともに、市内の川に水位計とデータ通信機器を設置し、市内43箇所の水位情報をシステムに反映。配信を7月28日から開始しています。

第7次舞鶴市総合計画に基づき、まちづくりの方向性や市の取り組み施策・事業をお伝えする「市政の今」。今回は、A1・IoT(※1)を用いた防災の取り組みについてお伝えします。



※2 オープンデータ…機械判読に適したデータ形式で、二次利用が可能な利用ルールで無償で公開されたデータ

※1 IoT…あらゆるモノがインターネットにつながり、情報のやり取りをすることで、モノのデータ化やそれに基づく自動化などが進展し、新たな付加価値を生み出すこと。